

特集：文化に媒介された環境問題

序

藤木 秀朗

環境問題はどうか感じられ、想像され、対処されてきたのか。アントロポセン——自然に対する人間の複雑な媒介——と言われる時代の地球規模のエコロジー的連関を東アジアの視点からどう考えることができるか。

2016年7月30-31日の2日間にわたって私たちは、こうした問題を掲げながらシンポジウム「文化に媒介された環境問題——東アジア関係学のエコロジー的探究／Culturally Mediated Environmental Issues: Ecological Connectedness in East Asia」(日英同時通訳)を行った。地球温暖化、大気汚染、ゴミ、遺伝子組換え食品・化学添加物、放射能、土地開発、種の絶滅、災害…。環境問題が、ヒューマンとノンヒューマンの別を問わず地球上のあらゆる生き物にとって喫緊の課題になっているのは周知の通りである。その一方、ともすると環境問題は自然科学、経済、政治が対処すべき問題であり、そこに文化が分かち難く結びついていることが認識されにくい状況があった。環境問題が、水・空気・土壌からあらゆる生き物の身体にいたるまで物質的・物理的な問題であることは明らかだが、同時に私たちはそれを科学、メディア、芸術、日常生活、社会運動などの文化的実践を媒介にして認識していることを忘れるべきではないだろう。つまるところ、現実的に差し迫る環境問題は、一つの学術領域だけでは対処できるものではなく、学際的で多様な見地から検討され議論されることなしには太刀打ちできないものである。本シンポジウムはささやかではあるが、東アジアに焦点を合わせつつ、人文社会科学の立場から環境問題の認識や実践に文化がいかに関与しているのかについて歴史的・現在の状況を検証しながら、この問題をめぐる学際的かつ国際的な議論に貢献することを目指した。

シンポジウムは、「新世代パネル：共生と軋轢」に続いて、「文学・映像のエコロジー的想像力」と「環境社会の交渉」という2つのセッションから構成された(本号「JACRC事業報告」を参照)。新世代パネルでは、4人の若手研究者がそれぞれ、東アジアにおける人口減少、日本の緑地保全活動、現代日本文学における東日本大震災の表象(本号「研究論文」に修正版掲載)、そして河瀬直美映画における女性とエコロジーの表象について口頭発表し、ディスカッサントのコメントをもとに質疑応答を行った。2つのセッションでは、各3つの研究発表が行われたが、1つを除きそれらすべてが、それぞれ加筆・修正の上で本特集に収められている(朱翹璋の研究発表については、発表者の希望により別の論考を掲載している)。各セッションでは、ディスカッサントのコメントをもとに1時間の議論を行い、さらにシンポジウムの最後には100名近い来場者も交えて2時間にわたる全体討論を行った。

本企画は、さまざまな方々、組織からの支援により実現した。シンポジウムはハーバード・イェンチン研究所から多額の助成金を受けた。中国の浙江大学に共催者として協力していただき、当大学の准教授・王建剛氏に参加していただいた。早稲田大学の金井景子氏には新世代パネル、金沢大学の結城正美氏には第1セッション、名古屋大学環境学研究所の青木聡子氏には第2セッションのディスカッサントを担当していただいた。新世代パネルでは、学外からクリストフ・フルプレヒト氏(総合地球環境学研究所)と高瀬唯氏(日本学術振興会特別研究員・千葉大学)に報告していただいた。これらの方々、さらにはシンポジウムの運営を支えてくださった通訳者とデザイナーの方々、事務職員、大学院生たち、そして当日会場にお越しいただいたすべての方々に心よりの謝意を表したい。